北海道医歌人会詠草

惑い

旭川　稲積　文子

辻褄の合わぬ言葉をさえぎれず何で来院したのかと問うをためらう
説明を理解する意志などはなく自己主張のみして去りし人あり
医師われの誇りに耐えて言葉にも顔にも出せない空しき孤独
白に合う薄紫のセーターでさあ頑張ろう月曜日の朝
降り止まぬ雪の中に立つナナカマド感情などとは無縁の如し

天気予報

江別　三宅　浩次

超速のコンピュータが描き出すやや怪しげな明日の天気図
大切な時に限って悪天候天気予報に文句つけたし
この先も寒さ続くと予報士は冷たい顔して言い放つのか
「はやぶさ」の無事の帰還を冷静な学者も祈る神や仏に
この先のすべてを決める神よりは不確かなままこのほうがいい

日常の瑣事

札幌　古屋　統

夜半に覚め独りごと言う我が癖が慶慶妻の眠りを阻む
今想う父は無呼吸症候群鼾を母は嘆き給いき
わが鼾われ覚えねば寝室を別かつと言はぬ妻に謝すべきか
思い立ち急ぎ書棚の前に来て何の用事かはや憶えなし
自らに試して成らず朝めしの汁の具を問う記憶のテスト

元旦

美唄　吉村　誠治

賀状には健康案ずる一言が多くなりたり米寿の朝(あした)
友からの賀状の添書読み行きて健康長寿をしみじみと謝す
元旦の家族写真は年毎に和服の孫の賑わい増えくる
初詣で終えたる孫は急ぎ行きおみくじ求め大吉を見せる
康と恒の対談聞きて納得す思えば我も戦中派なり

ツルウメモドキ

札幌　浜島　泉

妻は旅少し遅れて我勤務ツルウメモドキの実に細き雨
山肌の斑の模様それぞれに色はた形今日また替はる
木枯らしに色づきし葉が落ちて舞ふやはらぐ日差し蝸牛行く
西岡の3・11のバス停を通過せり今日津波千日
高校の球技大会選手らと応援人らバスを降り行く

冬の旅

釧路　児玉　昌彦

漠々と雪の原野をひた走る列車の窓にふぶきの奔流
雪原のかなたよりあなたへと農道横切る狐一匹
積雪の山に草喰む道産子の白く吐く息たくましき脚
雪道をトボトボ歩く黒き影・二・三・つどいてまた別れゆく
過去を棄てに女の向かいし北の果ていま青い目の少年が往く